

TENTI TODAY			1
受信メール ** (満身創痍ですが元気です)			1
会員の広場			
論文	言論人 石橋湛山	篠塚 徹	2
歴史	郷土意識の変容と地方出版人の使命(2)	北林 昇	7
報告	1000 年前の国立市と谷保天満宮界隈	臺 一郎	9
歴史	「了解日本(日本を知る)」	兪 彭年	1
	(25)日本人の姓と名を考える (1)		1
歴史	E・ライシャワーの日本昭和史(6)	津田 孚人	1
			5
事務局 (編集後記)			1
			8

TENTI TODAY

先日、大学時代のクラス会があり、幹事から、今回で終わりにしたい、という提案があり決定しました。卒業して満63年余、よく続けました。月末には、第一生命・バスケット部の会があり、廃部を決定するとのこと。戦前、1940年ころにスタート、80年以上続いた歴史ある部ですが、時代の流れでやむを得ないようです。



早稲田の優勝がかかった早慶戦の野球をみに久しぶりに神宮球場へ出かけました(ひとりで)。入場できたのが外野に近い内野席、視界がボヤケ、プレーがほとんど分らず、スポーツ観戦はテレビに限る、と覚りました。行動範囲がだんだん狭まり、寂しくなります。

受信メール (敬称略)

天地 10月号ありがとうございます。御地はキンモクセイの香る季節かと思います。函館は雪虫が飛び交う季節となりました(最低気温が5度前後です)。冬を意識するようになりました。(10/17・志賀)

恥ずかしながら、円仁さんと膨大な貴重な記録があったこと、そして、その膨大な漢文の記録を邦訳までしたのが、なんと、日本人ではないライシャワーさんだということ、驚きました。航海での艱難、漢国内でのワイロを含む諸事対応、或は、朝鮮人の

広範な浸透など、ライシャワーさんの解説でわかりました。これからも、“天地”により、学ばせていただきたいと思います。(10/17・酒井)

満身創痍ですが元気です (11/15・大須賀四郎)

87歳になった。田舎育ちで、自分の家で取れた米、野菜の入った味噌汁、時折食する鮎子から来る魚とで育った身体である。この歳になっての率直な感想は、“齢を取ることはキツイ”。

6年ほど前に、左足首が痛くなり手術した。若いころは時折痛みが出ても何とか過ごしている内に直ったが、我慢できなくなって入院し、鉄(kane)で固定した。原因は、学生時代のスポーツ。

最近は頻尿に悩まされている。夜の睡眠中に4、5回は起きざるをえない。尿が出なくて悩んでいる同年代の友達もいるので、“出したくて苦しんでいる奴に比すればまし・・・”と自分に言い聞かせて、布団から立ち上がっている。

視力の衰えが激しくなっている。眼科医に通い2-3か月に一度注射を受けている。これがまだ薬の特許期間らしく、結構 expensive。

高血圧、いわゆるホームドクターに6週間ぐらいに prescribe してもらい、薬を薬剤店からもらっている。

整形外科医にリコメンドされて“毎日歩かないとだめですよ。さもない歩けなくなることもありうる”と言われている。二本の杖を使用し極力言われたように歩くことにしているが・・・このところは歩くことがきつく感じて、しかも左足下部の痛さが増しているの、歩行距離を減少している。それでも痛い。

足首の手術から一年後、朝、起きようとしたら、首が持ち上がらない。あわてて救急車、入院手術。頸椎のトラブル。結局、1.5か月入院。幸いにも今日至るまで順調だが、鉄(kane)7-8本使いやぐらを組んで保持、幸い順調である。

このところ尻の痛みにまいつている。有名な医院に通っているが、“名医によると、痔疾は全く無い。あくまでも心理的なものでしょう。例えば良い音楽を聴いているときなど感じないでしょう。痛みは・・・”、との診断結果。何度か通っているが同じことの診断で、くれる薬は boraza G 軟膏、および座薬。

いろいろな体の部分損傷から全くフリーとは言えないが、総じて大過なく過ごせているのは有り難いこと、親が丈夫に育ててくれたのに感謝している。

大相撲九州場所を楽しく観ていますが、お尻の痛さが邪魔している。TV 観戦より Radio 聴取のほうが楽な状況ではありますが・・・。

会員の広場

言論人 石橋湛山

篠塚 徹 (83歳)

2024年8月

1 私 の 原 風 景

石橋湛山は1956年12月14日自由民主党大会において、決戦投票の結果、総裁に選出された。同年12月20日、第3次鳩山内閣が総辞職し、衆参両院において石橋湛山が内閣首班に指名され、12月23日石橋湛山内閣が成立した。当然のことながら新聞各紙は連日この経緯を詳しく報道した。当時私は中学2年生であつ

たが、この影の薄い少年は、奇妙なことに新聞で目を通すのはスポーツ面と政治面であった。

東京産経ホールで行われた結成間も無い自由民主党（1955 年 11 月結成）の総裁選出は、岸信介、石橋湛山、石井光次郎の 3 者で争われ、第 1 回投票では岸信介が 1 位であったが過半数に達せず、決戦投票では石橋（2 位）石井（3 位）が連合を組んだ結果、僅差で石橋が岸を破った。この結果石橋内閣が誕生したのであるが、私には一連の動きの新聞記事を興味深く読んだ記憶がはっきりとある。

石橋湛山の首相としての登場は大いに期待をもって迎えられたが、彼は翌年 1 月 25 日に急性肺炎で倒れ、早期治癒の見込みが立たず国会審議に耐えられないとして、同年 2 月 23 日石橋内閣は総辞職した。

石橋湛山が総理・総裁として連日新聞の一面を飾った際に、その経歴が詳しく紹介されたが、長年東洋経済新報社に籍を置き数多くの論説を展開したことを知った。

石橋湛山は、数多くの石橋湛山論においてわが国において稀に見るジャーナリスト・経世家・思想家として再認識されつつあるが（増田弘編『小日本主義 石橋湛山外交論集』1990 年、草思社）、増田弘が「まさしく湛山の真髄は、経済評論家でもなく政治家でもなく、言論にある。

その生涯における 1900 編の論説は、吉野作造をしのぐ近代的民主主義精神を体現しており、明治・大正・昭和の各時代状況の中で日本の進むべき針路を顕示している（上掲書）」と強調している論を借りて、本稿の表題をあえて「言論人 石橋湛山」とした。

2 本稿執筆のきっかけと今夏読み込んだ文献

日本の少子化現象が坂道を転げ落ちるように加速しており、2023 年の合計特殊出生率（1 人の女性が生涯に産む子供の数）は 1.20 人と過去最低を更新した。

このような基調が変わらない限り、1 億 2400 万人（2023 年）の人口は、2100 年には 6300 万人に半減すると推計されている（民間の人口戦略会議による）。

そのため、日本政府は少子化による人口減少を食い止めるために多くの施策を打ち出しているが、人口減少の背景には日本社会特有のさまざまな社会的要因が絡んでいるだけに人口減少の速度を和らげかつ一定の水準で人口規模を安定化させることは容易ではない。

仮に今後の施策によって一定規模の水準で人口を安定化させることができたとしても、国民が確固たる将来展望を持てる多様性に富んだ社会を構築できるようにしなければならない。そこで私の頭に浮かんできたのは、かつて石橋湛山が提唱した小日本主義論であり、少しでも参考になるのではないかと考えた。

しかし湛山の小日本主義論を調べてみると、時代背景がまったく異なるのはもちろんのこと、当時日本の人口は急激に増えつつあり、貧困に喘ぐ人々の海外移民が行われつつあったさなかにおいて論じられていたことが分かった。

そこで、将来における日本の人口問題はしばらく措き、この際言論人としての石橋湛山についてその足跡を垣間見てみたいと思うようになった。

以上のような経緯を経て、今夏は石橋湛山に関する資料・書籍をかなり読み込んだ。とは言うものの、本人の評論集をはじめ湛山に関する資料・書籍数は膨大であり、私の読んだものはそれらのごく一部に過ぎない。次に、私が今夏対象にした文献を列挙するが、各文献の末に本稿で引用する際の略称を書いておく。

小島直記『異端の言説 石橋湛山 上』1978 年、新潮社（小島上）

小島直記『異端の言説 石橋湛山 下』1978 年、新潮社（小島下）
松尾尊兌編『石橋湛山評論集』2023 年（第 1 刷は 1984 年）、岩波書店（松尾）
増田弘『小日本主義 石橋湛山外交論集』1990 年（第 1 刷は 1984 年）、草思社（増田）
佐高信『良日本主義の政治家 いま、なぜ石橋湛山か』1994 年、東洋経済新報社（佐高）
半藤一利『戦う石橋湛山 新装版』2008 年（新版は 2001 年）、東洋経済新報社（半藤）
谷沢永一編『改造は心から 石橋湛山著作集 4』2010 年（第 1 刷は 1995 年）東洋経済新報社（谷沢）
上田美和『石橋湛山論 言論と行動』2012 年、吉川弘文館（上田）
文入努『石橋湛山における小日本主義の蹉跌 それはリアリズムであったのか？』インプレス R&D（文入）
山内昌之「書評 石橋湛山論：言論と行動」2012 年 4 月 29 日付日本経済新聞朝刊（山内）
保阪正康「日本の地下水脈第 45 回 湛山にみる知識人の 3 条件」2024 年 8 月号、文藝春秋（保坂）
田中秀征「昭和 100 年の 100 人 石橋湛山 前途は実に洋々たり」2024 年 8 月号、文藝春秋（田中）

3 総合的な石橋湛山論

戦前は言論人として戦後は政治家として活躍した石橋湛山の言論と行動を明らかにした総合的な石橋湛山論は、上田美和によるものであろう。上田の『石橋湛山論』が 2012 年 3 月に上梓された際に山内昌之は、見事な研究成果であると評価した。山内の書評を次に引用する。

石橋湛山は日本の保守政治が誇る自由主義者の一人である。独創的な自立主義と経済合理主義を信じる独立自尊の評論家であり政治家でもあった。しかし、戦間期に唱えた「小日本主義」は、戦時の大東亜共栄圏における内地海外の分業論に見られる国策への協力と矛盾し、戦後の自立主義による憲法改正論は日中米ソ平和同盟の理想に反するのではないか。

こうした疑問に対して、著者は丹念な史料調査と聞き取りによって、小日本主義でなく自立主義こそ、大正デモクラシー期の論壇に始まり戦後に自民党総裁・首相として政界の頂点を極めるまで、石橋の一貫して不変の柱だったと解き明かす。見事な研究成果である。

確かに小日本主義は、植民地や海外領土での既得権の放棄や、抑圧された民族の自立主義への配慮を核としていたが、彼が中国の自己統治能力を疑ったのは自立主義が自己責任を要請するという独特な論理からであった。民族自決には自立主義と自己責任が伴うとした石橋の主張は、「強い個人」のように「自立能力のある強い民族」を想定していた。

敗戦後の石橋は、「自己によること」「自己決定」「自己責任」を思想の骨格としながら、「どこまでも米国をリーダーとして、共同して中共問題を解決したい」と、対米協調を対米自立と両立させる道筋を志向した。対米協調と自己責任が結びつくなら、石橋の外交安全保障論は当然にも自主防衛の立場に傾斜することになる。

全面講和論の安倍能成に「将来日本に力が出来れば自分でやるべき義務がある」と述べたのは、政治リアリスト石橋の真骨頂であった。「絶対平和主義」や「平和

の砦」を信じる安倍に対して「理想はいい」とにべもないのだ。

著者は、石橋の政治姿勢をリアリズムの観点からあまり分析していないが、戦中の「愛国的戦時抵抗」や戦後の非武装中立論の拒否は、評論家から政治家に至る石橋に一貫する自立と経済合理性を支えたリアリズムの発露でもあったのではないか。「評論を生かして現実化する」という石橋の信念は、政治リアリズムで検証されない理想を政治家が抱く虚しさへの厳しい批判ともなっている。(山内)

この書評で取り上げられた事項について上田の石橋湛山論によって解説したいが、その前に上田が420頁にも及ぶ湛山論を著すに至った動機を述べてみたい。いずれも同書からの引用である。

上田には大学入学前に出あった「思想の人として行動し、行動の人として思索せねばならぬ」というアンリ・ベルグソンの忘れられないことばがある。上田はこのことばを反芻し、このような人間が存在するなら、具体的にはいったいどのような生き方のことだろうかと考えた。このことばは以後、上田のなかに深く沈みこんでいた。

早稲田大学政治経済学部に入學してからよく立ち寄っていた書店で一冊の本に出あったが、それは岩波文庫の『石橋湛山評論集』(松尾尊兌編、岩波書店、1984年)である。この本をきっかけに、上田は早々と卒業論文のテーマを石橋湛山と決めてしまった。繰り返し読み、よれよれになってしまったこの本は、上田にとって「はじめの一步」であり、今も大切な一冊である。

この著作『石橋湛山論』を通じて十代当時の自分が抱えていた問いに対する一つの答えを何とか示すことができたのではないかと、上田は思う。ベルグソンのことばにあるような、思想(言論)と行動の一致を目指す人物として石橋湛山を挙げる。長年の疑問への答えがみつかったという意味において、この石橋湛山論には上田個人の特別な思いがある。

山内は前述の書評において「著者(上田)は、小日本主義ではなく自立主義こそ、石橋の一貫して不変の柱だったと解き明かす」と述べている。

「石橋の小日本主義は、小さい日本で足るを知れという小国主義志向ではなく、彼のことばを借りれば大日本主義無価値論である。列国に率先した植民地および海外既得権の放棄、つまり大日本主義の放棄によって、逆説的に日本は世界大に活躍できる。石橋の小日本主義にはこうした、ナショナリスティックな意志が示されていたのである。(上田)」

「石橋の小日本主義を構成する要素は、次のようにまとめられるであろう。(1)経済的国益の追求(2)植民地・海外既得権放棄論(3)被抑圧民族の自立主義への配慮(4)英米白人帝国主義への抵抗意識(上田)」

「筆者(上田)は、自己による支配を最上のものとし、その結果については自ら責任を負うという思想を自立主義と呼ぶことにしたい。自立主義には自己責任が内包されている。失敗を他者の責任に帰することができないため、ときには厳しいものとなる。こうした個人の自立主義が民族に適用されたのが民族自決主義である。自立主義は石橋の初期の言論以来、重要な思想であり続ける。(上田)」

以上のような論述によって、山内の解説が理解できる。

山内の書評に出てくる「(石橋が取った)戦中の愛国的戦時抵抗」とは、具体的にどういう抵抗であろうか。上田は、石橋の1947年5月12日付「私の公職追放に対する見解」という中央公職追放適否審査委員会に出した書簡を引用している。

「私は昭和19年2月一人の男児をケゼリン島に於いて戦死せしめた。私は予て

自由主義者である為に軍部及び其の一味の者から迫害を受け、東洋経済新報も常に風前のともしびの如き危険にさらされている。併し其の私が今や一人の愛児を軍隊に捧げて殺した。私は自由主義者ではあるが、国家に対する反逆者ではないからである。一戦争末期、自由主義者でいるか、国家反逆者となるか、というぎりぎりの選択まで追い詰められた人の言である。(上田)」

この次男の戦死については、他の多くの著作でも取り上げられている。小島直記も半藤一利も、湛山の「私の公職追放に対する見解」における前述の部分に続く言を紹介している。

「私も、私の死んだ子供も、戦争には反対であった。しかし、そうだからとて、もし私にして子供を軍隊に差し出すことを拒んだら、恐らく子供も私も刑罰に処せられ、殺されたであろう。諸君はそこまで私が頑張らなければ、私を戦争支持者と見なされるであろうか。東洋経済新報に対し帝国主義を支持した等と判決を下されるのは、正にそれであると私は考える。(小島、半藤)」

半藤は、書簡を読み進めてこれらの文章に達したとき、眼裏が熱くなり活字がにじんでそれ以上読み進めなかったそうである。

内山の書評における「戦後の非武装中立論の拒否」について、上田は次のように論じている。

「筆者(上田)は、政治的環境の変化にもかかわらず、政治家時代の石橋は憲法第9条と軍備問題についての思想を大筋変えなかったと考える。それは、9条の精神を重視するために条項を残し、効力の一時停止という但し書きを加えるという改憲論と、日本の経済を損なわない程度の軍備は必要という認識であった。石橋は、晩年も非武装主義はとらず、改憲志向を保持した。しかし、石橋の持論の改憲とは、憲法第9条の曖昧さを解決するためであり、軍備増強のための改憲論論者とは方向性を異にしていた。(上田)」

なお、上田は「石橋は1965年12月の講演において、9条は現代世代において論理通りにはいかぬので、世界の国々が恒久平和の理想に燃え、同一精神、同一歩調のとれるまで、しばらく停止するという具合に今の憲法の条文のあとに条項を加えて、そのままにして9条を活かしたほうがよい。」と述べたことを紹介している。

また、上田は新安全保障条約成立(1960年)以降の石橋の憲法観を二重性と評している。「この時期、石橋は改憲論者であり、かつ、護憲論者でもあったのである。したがって護憲だけで石橋を論じるのは無理がある。石橋の改憲論は軍備増強の方向へ日本を牽引するための改憲とはほど遠かったが、同時に、護憲論といっても、憲法第9条の解釈をあくまでも非武装論と考える人々と石橋には、埋めがたい距離があったのである。(上田)」

本稿では、これ以降石橋湛山の言論と行動のうち私が特に注目した事項に絞って記述することとしたい。なお、対象とした石橋湛山の評論等は、いずれも抜粋である。

(文中 敬称略)

(備考)

小島直記 (1919年～2008年)福岡県出身、東大経済学部卒、海軍主計大尉、女子中学校教諭(社会科)等を経て小説家

松尾尊兌 (1929～2014年)鳥取県出身、京大文学部卒、歴史学者、京大教授、その後京大名誉教授

増田 弘 1947年生、神奈川県出身、慶大大学院法学研究科単位取得退学、政治学者、東洋英和女学院大教授を経て立正大特任教授、その後

立正大名誉教授

佐高 信 1945 年生、山形県出身、慶大法学部卒、高校教員等を経て評論家、東北公益文化大客員教授

半藤一利(1930 年～2021 年)東京府東京市出身、東大文学部卒、文藝春秋新社勤務後作家、新田次郎文学賞・菊池寛賞等受賞多数

谷沢永一(1929 年～2011 年)大阪府大阪市出身、関西大大学院文学研究科博士課程単位取得退学、日本近代文学・書誌学研究者、関西大教授、大阪文化賞等受賞多数

上田美和 1973 年生、神奈川県出身、日本近現代史研究者、オックスフォード大大学院 Modern History 専攻、早大大学院文学研究科博士後期課程修了、共立女子大教授

文入 努 1963 年生、千葉県出身、日本経済史専攻、早大大学院商学研究科修士課程修了、元図書館司書

山内昌之 1947 年生、北海道小樽市出身、歴史学者、北大大学院文学研究科博士課程単位取得退学、東大教授、その後東大名誉教授、紫綬褒章等受賞多数、横綱審議委員長

保阪正康 1939 年生、北海道札幌市出身、同志社大文学部卒、電通 PR センター、朝日ソノラマを経てフリーに、作家・昭和史研究家・評論家、菊池寛賞等受賞多数

田中秀征 1940 年生、長野県出身、東大文学部卒、北大法学部卒、元衆議院議員、総理大臣特別補佐・経済企画庁長官を歴任、福山大学客員教授

以下、次号

郷土意識の変容と地方出版人の使命(2)

北林 昇(長野県飯田市在住 76歳)

2) 地方史と民衆の郷土意識

①江戸・明治からつづく官撰地方史の伝統

ふりかえると、国体教育の注入と共同体心情の吸い上げにより「郷土愛」が歪められた歴史的事実に対して、戦後、国民の歴史認識は十分ではなかったと想う。私自身、郷里に戻り印刷兼出版業を起こすなか、事業のPRも兼ね地域の産業分野の記事を中心に地域誌『南・信濃』発行した際、下伊那地方の名望家で村長・県議・国会議員をつとめ、六朝風の書家、かつ子規門下の俳人北原痴山(本名阿智之助)の文に、菱田春草が挿絵を寄せた『伊那名勝誌』の復刊を企画広告した。

なお、痴山の父・北原稻雄は平田篤胤派国学の伊那谷における中心人物で、明治維新後は県の役人をつとめている。

つづいて、私の父の肝入りで、下伊那教育委員会を発行者に、地方史学者で『下伊那誌』の編纂にあたり、信州の国学者の勤皇誌にも優れた市村威人の著作をまとめた『市村威人全集12巻』の印刷と出版にあたった。下伊那郡内の主に元教員の家々を訪ねて売り歩き完売できた。教員の出自は、元々名主層が多く国学に造詣があり、著名な書家や画家の作品を所蔵する旧家で、著者への篤い尊敬があることを知った。

こうした地方史誌の出版をその時代背景からみると、江戸時代に遡り「天明の世直し状況の衝撃に対する学問人（豪農層や草莽の国学者などの地方知識階層クラス）としての受け止め方は、古風を復活させることによって地方支配の安定を意図したことであった」（芳賀登『地方史の思想』）とあるように、全国的に地方名望家の私撰地誌が各地で編纂され、前掲の『伊那名勝誌』もその流れだった。

そしてこの地方誌の流れは、明治5年（1872年）の太政官布告により官撰地誌（皇国地誌）の編輯を命じ、府県ごとに地誌担当者をつくり、村誌、宿町誌、郡誌をつくらせたことにつながる。この布告で、『長野県町村誌』も『下伊那史』も編纂がはじまり、昭和以降になって発行された。

なお、平成9年1月、私は天竜市二俣（現浜松市）の人々の篤い想いをうけて、賀茂真淵門下の国学者内山真竜の『遠江風土記伝』の復刻版の印刷発行のお手伝いをしている。このように官撰地誌（皇国地誌）の流れは、地方の名士層や教育者などの支持を得て地域に根深く浸透し、引き継がれてきた。

この『皇国地誌』について、芳賀氏は前掲の著書で、「それは明治維新一王政復古一政令帰一（中央集権体制）の上に立って民情把握を意味していた」。「そして地方住民の性格にまでふれ、陸軍省の用兵の立場からの調査と併行して行われた」と。また児玉幸多氏の論文「地方史研究の回顧と展望」を引用、「日本における地方史研究には、行政調査の伝統が色濃くあったことをあらためて確認しなければならない。そうした事実を目をおおって、地方史研究の研究史が在野史学承継のみを強調するのは、きわめて甘い考え方ではあるまいか」と結んでいる。

こうした地方史の基調は現在に至るまであまり変わっていない。戦後なぜ地方史家や教育者は、昭和11年「国家総動員法」、15年「部落会町内会等整備要綱」により村の連帯意識を利用して郷土愛をズタズタにした経緯について記述しなかったのか。太平洋戦争の日本史上の汚辱と苦惨にまみれた歴史の客観的事実を子供たちに教えなかったのか。

地方史家や教育者は、国体思想を高揚し軍国主義に協力したとは言え、この戦争に至った経緯を記述し残さなかったのか。この曖昧さがそののちの日本の戦後教育に、そして郷土意識の再生＝地域アイデンティティの生成に禍根を残したと思う。

3) 戦後、地方出版に見る民衆意識

戦後、郷土の文化は遅れたものとする風潮のなかで、自信を失った親たちは自分の稼業を息子に引き継いでもらうより、余力のある家は学費を工面して中央の大学へ子供を進学、欧米の知識や技術を学ばせ、大企業や中央官庁への就職を第一に願った。

先生たちも子供たちを学徒動員に送り出した弱みもあり、アメリカに習い郷土文化は遅れたものとする風潮から郷土教育をはばかった。こうした地域から離れた学校教育からは、子供たちの地域に根ざした主体的な意識、郷土愛が生まれなかった。

それでも少し生活が落ち着きはじめると、世界へ目を広げようとの新たな民衆の欲求に応えるべく、中央の出版社から百科事典などが相次いで販売され、そうした百科事典を持つことが地方におけるステータスになるなか、ようやく日本の書物にも目が向き、文学全集などが出版され、大正デモクラシーの文芸復興の時代を懐かしむ世代に読まれ出すと、郷土文化への愛着をよすがとする機運が再来、学校の先生のOBや年配の先生たちを中心に篤農家をファンとする郷土研究への情熱が高まり、全国各地で郷土誌が再刊された。

私の故郷、長野県飯田下伊那では郷土誌『伊那』を発行する伊那史学会が5千人を超える会員を数えた(現在は5分の1の1000人弱)。こうした文化状況のなか、私の父は印刷業のかたわら郷土出版事業に心を砕き、陰ながら「伊那史学会」をはじめ郷土の出版への支援を惜しまなかったことが、私の出版への憧れとなった。

(つづく)

1000 年前の国立市と谷保天満宮界隈

臺 一郎 (75 歳)

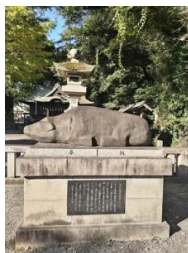
谷保天神北側の鳥居



谷保天神境内崖線の階段



谷保天神の拝殿前の座牛



谷保天神の透明な弁天池



谷保天神外の道路側溝



城山公園内竹林沿いの道



10 月号では国立市の大学通り界隈について、現状のみならず、街づくりが始まった 100 年前の様子や開発の経緯等を書いた。そこで、今回は同じ国立市でも南部に位置する谷保天満宮(以下谷保天神という)について、現在の天神境内の様子や神社が創建されたほぼ 1000 年前の状況、更に時間を遡り古墳時代の谷保のことなどを書いてみた。

中央線の国立駅で降りて南口に出たら、駅前ロータリー広場のバス乗り場3番から府中駅行もしくは聖蹟桜ヶ丘行のバスに乗る。バスは大学通りを真っ直ぐ南下して行く。一橋大学前、桐朋学園前、国立高校前などの文教都市らしいバス停が続き、谷保駅前のバス停を過ぎて甲州街道に突き当たるとバスは左折する。曲がってすぐのバス停が谷保天神前。そこで降りる。

国立駅からは 15 分位だろうか。歩いて2分ほど戻り、甲州街道を渡ると目の前が

天満宮の北側の入り口だ。灰色が目立たない鳥居をくぐればそこは谷保天神の境内。都内に良くある神社と比べると樹木が高く密度も濃い目。いかにも鎮守の森という風情だ。大きく広がった枝葉が天空に覆い被さり、ために境内は少し暗く、気温もやや低い感じがする。

敷地は 6000 坪。境内は多摩川の立川段丘とその崖線、そして崖下の青柳段丘に広がっている。甲州街道側の鳥居の先に延びる参道を進むと、ほどなく階段に行き当たる。階段は立川崖線に設置され高低差は 7～8m 位か。階段の下にも境内が広がっていて、右手には拝殿や本殿が、左手には神楽殿がある。また階段上部の左手には梅林が広がり、右手の傾斜地は濃密な雑木林が繁っている。

拝殿の手前には彫刻家の關 敏(せき びん)が彫った石の座牛が鎮座する。この彫刻は、悲しみに動かなくなった牛を表現しているという。この彫刻牛の先には、今度は参拝者が頻繁に撫でるためか鼻先から頭頂部にかけてツヤツヤと光った青銅の神牛が鎮座している。その先が拝殿だ。筆者も賽銭を箱に落とし、二礼二拍手して願い事を念じた。

谷保天神が創建されたのは平安時代の延喜 3 年。西暦だと 903 年だ。最初は今の国立府中インター近くに創建されたという。その後理由は不明だが、養和元年 11 月、西暦 1181 年に現在地に移された。東関東では最古の天満宮であり、亀戸天神社、湯島天満宮と合わせて関東三大天神と呼ばれている。菅原道真の三男道武が父を祀って興した社で、故に今でも学問の神様として毎年受験シーズンが近づくと、多くの学生がお参りにやってくる。

本殿は拝殿のすぐ後ろに位置し、裏手には巖島神社の小さな祠と弁天池がある。池の水は崖下の湧き水から引いているが、感動的なほどに透き通っていて、水中を悠然と泳ぐ朱色、白色、灰色の大きな鯉がクッキリと見える。池から溢れ出た水は境内の外の道路脇側溝に流れ込む。澄んだ水が清らかな音を立てて流れていく。晴れた日の午後、この道を歩いているだけで、何故か気分が癒やされる。

ところで谷保天神界隈は、はるか縄文の時代から人が住みついた。国立市の調査によれば、市内の遺跡や古墳の数は 29 箇所。大半が多摩川の昔の川筋が造った立川段丘、立川崖線、そして崖線下の青柳段丘にかけて分布する。谷保天神の境内はまさにこれらの段丘や崖線にまたがっており、立川崖線の下からは豊かな湧水が流れ出ている。所謂ハケの湧水である。

谷保の地に神社が創建されたのも、一帯が水の豊富な湧水帯であったがために、古くから人が住みつき、稲作等が行なわれ、集落が形成されたからだろう。また武蔵野国の国府のあった府中に近かったこともあったのかもしれない。

ところで谷保天神から 15 分ほど歩くと、鎌倉後期頃に豪族三田氏が館を築いたとされる城山公園に辿り着く。丘を覆う誰もいない竹林や雑木林の中の林道を歩くと、時折吹く涼風が起す葉擦れの音以外は何も聞こえない。その静けさはそこが都内であることを忘れさせるほどだ。丘の麓には展示のために移築された古民家住宅があって、裏手には湧水を引き込んだ日本庭園が造られている。

国立駅前から延びる大学通り沿いの街並みは、ここ百年くらいで出来上がったものだ。お洒落で知的でモダンな街となったのはせいぜいここ 40 年くらいの間だろう。大正以前は人家も殆どない一面の雑木林に覆われた土地だったのだ。一方、豊か

な湧水に恵まれた南部の谷保天神界限は、神社が創建された時代よりさらに以前の奈良時代や古墳時代から人々が住み着き、稲作を行い、集落を形成していた土地である。

こうしてみると、国立市は、知的で洒落た商店や住宅が立地する大学通り沿いのモダンな街と、遙か奈良・古墳の時代から集落が形成された南部地区の谷保天神界限の歴史ある街が同じ市内に共存するという表情豊かな魅力的な都市なのである。

「了解日本」(「日本を知る」(2019年出版)
(26)

俞彭年 (87歳)

日本人の姓と名を考える (1)

苗字と名前の書き方

麻生太郎、岸信行、小泉純一郎など、日本人の名前のほとんどは漢字で書かれているので、中国人にとって覚えやすく書きやすい。ただし、日本には中国の簡体字とは異なり、「対(对)」、「圧(压)」、「広(广)」、「団(团)」、「伝(传)」、「辺(边)」、

「沢(泽)」、「図(图)」、「仏(佛)」など、独自の簡体字があることに注意してください。日本には「対」「圧」「広」など中国の簡体字とは異なる独自の簡体字があるので注意が必要です。日本では簡体字は使用されていないため、翻訳する際には、簡体字と日本語の簡体字の区別に特に注意する必要があります。例えば、日本語の「小淵優子」は中国語で「小渊优子」、日本語の「広田幸一」は中国語に訳すと「广田幸一」、日本語の「松田聖子」は中国語で「松田圣子」と訳される。また、簡略化された字があるのに、簡略化された字を書かずに繁体字を書く日本人もいるが、これは私権であり、例えば「渡辺富久子」ではなく「渡邊富久子」、「水沢辰夫」ではなく「水澤辰夫」、「末広文次」ではなく「末廣文次」を書くことを尊重すべきです。

日本人の姓と名の順序は中国人のものと同じで、姓は前にあり、名は後にある。例えば、田中角栄、田中は姓、角栄は名、中曽根康弘、中曽根は姓、康弘は名、森喜朗、森は姓、喜朗は名。名前を書くとき、中国とは少し違います。つまり、姓と名は連続して書かれておらず、その中に1マス空けなければならないということです。

例えば田中角栄は「田中 角栄」、中曽根康弘は「中曽根 康弘」、森喜朗は「森喜朗」と書く。スペックがあるので、姓と名が一目瞭然です。しかし、姓と名を連写する習慣を破った日本人もいて、その中には1マスも空けないこともある。例えば「井出祥子」、「唐木順三」、「多田道太郎」となっているがこれは個人の権利であり、尊重すべきです。

実は私たち中国人にとって、スペースが空いているのはとても役に立ちます。見ただけでどの部分が姓で、どの部分が名で、間違いを避けることができます。名前を間違えるのは大変失礼なことです。例えば「連城三紀彦」を連書すると、姓と名

がはっきりしないので、「連城三紀彦」の中に 1 マス空けて書くと、姓と名がはっきりします。

日本人の姓のほとんどは漢字 2 文字だが、「林」「東」「牧」「原」「岡」「南」「谷」「金田一」「大久保」「五十嵐」「大河内」「長谷川」「後藤田」「野呂田」など、1 文字の姓と 3 文字の姓も少なくない。「五百旗頭」「佐野川谷」「武者小路」「那波多目」「小比類巻」「勅使河原」など、わずかだが 4 文字の姓がある。だから姓と名は連書されず、スペースで、私たち中国人にとって姓と名とは何かを理解するにはとても便利です。

有名な日本の政治家「二階堂進」の姓と名を間違えた国内放送を聞いたことがある。アナウンサーは「二階」を姓、「堂進」を名と思っていたが、実は彼の姓は三字の「二階堂」で、名は一字の「進」だった。

日本人の姓氏

南宋の鄭樵撰の『通志・氏族略序』では、「三代前、姓は二分され、男は氏、婦人は姓で呼ばれていた。貴族は氏があり、平民は氏がなかった。——三代後、姓と氏は一つになり、——」と記載されている。

日本古代には氏族を表す名称、例えば歴史上有名な四大氏族、藤原氏、橘氏、平氏、源氏、姓は家族の世襲を表す官職の名称で、「真人」、「朝臣」、「宿禰」、「忌寸」、「道師」、「臣」、「連」、「稻置」など 8 大官職がある。だから「藤原朝臣」は氏姓です。

その後、姓は徐々に社会的意義を失い、表記されなくなり、「氏姓」が合体して現在の「姓」になり、中国語の姓と同じ意味になった。日本は 1867 年の明治維新までは「貴者有氏、賤者名無氏」だった。貴者とは皇族、貴族、武士であり、卑しい者は農民、手工業者、商人である。

1870 年（明治 3 年）に庶民（農工商）に苗字を認める新法が公布されたが、長い間苗字を持たないことに慣れていた庶民は熱心ではなく、結局は〇〇村の〇〇、〇〇屋の〇〇と呼ばれていた。

そこで 1875 年（明治 8 年）に太政官令により庶民に苗字を強要するようになり、苗字がなくてはならなくなった。その結果、多くの農民が村長や胥吏、和尚など文化のある人を訪ねて行き、自分に姓をつけるように頼んだ。訪ねて来た人があまりにも多いので、手に持って飲んでいるお茶の品名、漁民が捕ってきた魚の名前、その農民が住んでいる地形環境なども苗字にしてしまった。貴族や武士の姓を自分の姓とみなし、結果的に尊厳を冒すことを理由に官府から叱責された庶民もいた。

日本人の名字は、上記の乱取り以外にも、氏族の称号、居住地名、所任官職、職業、勤務番号、居住地理などから取ったものが多い。私たち中国人にとっては驚くような姓があり、「豚」、「禿げ」、「瓦」、「鬼頭」、「九鬼」、「氷室」、「熨斗」、「百足」、「唯是」、「神鳥」、「朽木」、「我妻」、「碧海」、「万歳」、「五百住」、「四十物」などの姓がある。また、よく考えてみると、「天皇」は実際に称号であり苗字でもある。

古代から大陸や朝鮮半島から日本に移住する人が多く、当時の日本人は移住してきた人を「渡来人」、「帰化人」とも呼んでいた。勅命万多親王（嵯峨天皇）らが 815 年に編纂した『新撰姓氏録』によると、当時の京畿地域の氏族 1182 人のうち、諸蕃（「大漢、三韓の族」）は 326 人で、3 分の 1 近くを占めていた。

日本の史書『日本書紀』によると、後漢靈帝（12 代）の時に阿知使主とその息子の都加使主が 17 の県の民衆を率いて朝鮮半島を経て日本に来て大和一帯に定住

した。「帰化人」の姓には「秦」「大秦」「大蔵」「惟宗」「宗」「漢」「狛」「高麗」「犬養」「鵜飼」などがある。

日本が朝鮮を併合した後、朝鮮人を皇民化するための措置として、1939 年に公布され、1940 年に「創氏改姓」政策が実施され、朝鮮人はみな姓を変え、日本人式の姓を取るように強要された。

日本が台湾を植民地支配していた時期にも、台湾人に改名する「改名」運動が行われ、台湾人は皆、日本風の名前に改名しなければならなかった。台湾独立のゴットファザー李登輝の日本名は「岩里正男」。日本が第二次大戦で降伏すると、北朝鮮は直ちにこの政策を廃止した。

外国人が日本国籍に加入することを日本は「帰化」と呼ぶ。「帰化」にはいくつかの条件があり、条件に合った外国人が「帰化」することができる。「帰化」した人はすべて姓を変え、必ず日本人式の姓を取ることを規定し、日本人になったことを示している。日本が国際化の流れに適応するためか、ここ数年日本政府はやり方を変え、「帰化」した外国人は姓を変えずに元の姓をそのまま使用することができるようになった。

日本の法律では夫婦同姓原則が施行されており、結婚後は夫婦ともに夫の姓を名乗るか、妻の姓を名乗るかで、夫婦それぞれの姓を名乗ることはできない。日本人は女性が結婚することは、夫の家族の一員になることを意味するという意識があるので、夫の姓を名乗るときには、自分の姓を使うことはできない。

調査によると、結婚後に妻が夫の姓に変わった人は 98.6%に達した。女性は結婚して姓を変えた後、社会活動に従事する上で様々な不便と損害を受け、女性の自立にも悪影響を与えたため、1970 年代になって夫婦同姓の原則に反対し、「夫婦別姓」の声が出てきた。

近年、この声はますます大きくなり、1996 年法制審議会民法改正諮問報告では、結婚後に同姓にするか、別姓にするかを選択できる夫婦姓選択制を構築することを提案した。2001 年 5 月に政府が実施した世論調査によると、選択制に賛成 42.1%、反対 29.9%だった。与党自民党内の反対意見が頑固で、選択制を実施すれば家族の「一体感」が失われるとの見方が強いため、日本政府はいまだこの提言を実施していない。

印鑑は名前を証明するものであり、名前の持ち主の代表でもある。現在、中国では個人印鑑の役割が小さくなっており、印鑑の代わりに署名することができる場合が多い。しかし、日本では個人印鑑の役割は依然として大きく、署名が押印の代わりにならない場合が多い。

日本では仕事と生活に 2 種類の印鑑があり、1 つは「実印」と呼ばれ、それは自分を代表する正式な印鑑であり、居住地の政府機関に登録された印鑑でもあり、必要な時に居住地の政府機関は「印鑑証明」を発行し、その印鑑が確かにその人の正式な印鑑であることを証明するように要求しなければならない。

「実印」の大きさには規定があり、25 ミリ四方以上、8 ミリ四方未満、はだめで、印影に欠損があってはならず、1 人 1 枚しか持てない。「実印」は公証書、不動産証、各種契約書、各種証明書などの重要文書に押印するために用いられる。

「認印」という印鑑もあり、一般証明用の印鑑であり、金品の受け取り、出勤、一般書類の押印に用いられ、姓と名を刻むことができるが、多くは姓だけを刻み、数量に制限はない。

中国では個人印鑑がなく、仕事や生活にはあまり影響を受けないが、日本では個人印がなければ、仕事も生活もできない。

日本の「表札」、中国の「門標」

日本の一軒家の家の前には、この家の主人（または居住者）の名前が書かれた「表札」（「標札」、「門札」、「門標」とも呼ばれる）が掲げられ、アパートには「表札」はないが、各ポストにはその家の主人（または居住者）の名前が表示されている。

中国では表札をかける習慣がなく、門標には地域や町名、家の番号などが書かれている。

日本の各家は門標をかけず、門標は一般的に街の電柱や壁にかけられ、この一帯の町名や番号を表している。つまり日本は1軒1軒の番号ではなく、1つの番号は1つのエリアを表し、1つのエリアには1軒だけではない。

中国の門標は行政部門が統一的に作り、デザインが統一され、行政部門が掲げる。日本人の「表札」はそれぞれ自分で注文したもので、デザインはさまざまで、材料は木製、石質、金属、磁器質、ガラス質、人造大理石のものもあり、さまざまで、制作は洗練されており、名前の書体も洗練されており、一般的には店に自分の要求を出して注文する。

日本で初めて友人宅を訪ねるのに、もし事前に調べて理解しておらず、友人の家の住所だけで探すのは大変である。日本の番地は少なく、場所によっては番地が不規則に並んでいるので、探すのは非常に不便である。せっかく住所を見つけても、友人の家がどこにあるのかを探す必要があるので、「表札」の名前を見てこそ見つけることができるのである。

従って、最初に訪問するには、相手に場所を約束して迎えに来てもらうか、事前に相手に標識的なものを聞いて探してもらうのが一般的である。

中国では、番地を探せば必ず見つかるし、番地の配列には規則があるので探しやすい。中国は1軒1つの番号なので、この番号を見つければ、自分が探している友人の家を見つめることができる。もし友人が引っ越して知らせてくれなかったら、あなたは古い住所で探すと、間違った人を探すことになる。日本のように「表札」がかかっていれば、そこに住んでいる人が友かどうかを知ることができるのである。

だから理想的な方法は中国の門標と日本の「表札」を結合すること。各家庭が「表札」と「門標」をかける、このような社会管理の方式は実現するだろうか。

「表札」は実際に家の前に掲げられた名札で、この家の居住者が誰であることを示している。「表札」がかかっていない家は、誰も住んでいないことを意味し、空き家である。居住者が一世帯で一人ではない場合、「表札」の人名は世帯主の名前であり、家族の名前は一般的に「表札」には書かれません。

日本では世帯主は一般的に夫であるため、「表札」の名前は夫の名前であり、妻も夫の姓を名乗り、子供も父親の姓を名乗るため、郵便配達人は姓で配達し、郵便物を間違えないのが一般的である。

筆者はかつて日本で働いていたが、住んでいたのは職場のアパートだった。私たち夫婦は別姓だったので、アパートの自宅ポストに私たち2人の名前が書かれたラベルを貼り、郵便配達員は私たち2人の郵便を私たちのポストに投函し、届かないことはなかった。

「表札」に苗字だけ書いて名前を書かない場合もあるが、それは各人自身のこと、どのように書くかは決まっていなからである。家の前には苗字だけで名前のない「表札」が掲げられている。これはここが〇〇家であることを示しており、「田中家」、「福田家」、「鳩山家」のように、一般的に大家の邸宅が掲げている「表札」は苗字だけを書くのである。

「表札」の字は漢字を書く習慣があるが、最近では「小田」を「ODA」、「松村」を「MATUMURA」、「金子」を「KANEKO」など、日本のローマ字を書く人も現れている。「横山けんいち」「林イチロウ」「船田しげる」など、漢字と仮名の混字もある。規定がないので、完全に本人が決めることができる。

誰かの家にホームステイしているとき、一般的にはホームステイ者の名前が書かれた「表札」は掛けない。郵便配達人に誰かの家にホームステイしていることを知ってもらうために、郵便物を送る人はメールの表紙にホームステイ先の主人の姓、姓を書いてから「方」の字を書いて、これがホームステイ先であることを示してから、ホームステイ者の名前を書くように改行してください。例：森下様方〇〇〇〇様

(2009 年 9 月 10 日)

E・ライシャワーの日本昭和史(6)

津田 孚人(87歳)

:「ライシャワーの昭和史・ジョージ・R・パッカー著・森山直美訳、講談社」より

ハーバードでエドウィン・ライシャワーに学んだ研究者は、恩師を回想してこのように語る。「学者としてのライシャワーの最大の貢献は、全体像をとらえる能力だった。そして卓越した知識の総合者であり、大きな枠組みで系統的に組み立てる能力を持っていた。その「大きな枠組みとは何だったのか」。エドウィンは、円仁の日記に取り組み、学者として自分のもっとも深遠な信念を明らかにした。唐代の中国(618~907)は、同時期のヨーロッパ文明よりはるかに優れていると考えていた。

「7世紀の中国は、その時代のいかなる政治単位よりも抜きんでていた。漢(紀元前206~紀元220年)の時代に、中国はすでに地中海世界に並ぶほどになっていた。いよいよ世界で最も強く、最も豊かで、幾つかの点で最も文化が進んだ国として優位を占める千年紀がはじまっていた。中国人は、ゲーテンベルク聖書の3世紀以上前に印刷技術を発明、唐朝の支配者は、安定し、頼りになる官僚制度、実力本位の試験制度、組織化の才、驚異的なほど洗練された文学を確立していた。仏僧、円仁は、4世紀後に中国を訪れたマルコポーロよりもはるかに信頼できる、同情に満ちた観察者だった。」

また、エドウィンは、基本的なアイデンティティを失わずに、中国や(後年は)それ以外の外国文化の影響を輸入するという日本の能力に大いに興味をそそられていた。円仁ら中国を訪れた仏教徒は、宗教の知識だけでなく、統治、都市計画、言語や文学の技能、官僚制度についての重要な情報を自国に持ち帰っていた。さらに近代日本に影響を与えた外国の影響を追跡し、16世紀から20世紀にかけて西欧列強が近接しはじめたとき、日本人が翻弄する外国の影響をいかに濾過したかを、興味深い細部にまでわたって描写した。

1937年の時点における東アジアの歴史と文化についてのアメリカ人の甚だしい無知、エドウィンの中には、日本、中国、朝鮮半島の重要性について、アメリカ人、そ

れもとくに政策決定者を教育するという使命に生涯を捧げようという決意が見られるようになった。

当時、ハーバードなどの大学における思潮で主流だった定説は、人間の歴史は、個人にはほとんど制御できない大きな非人間的な力によって決定されるというものだった。しかし彼の円仁描写は、一人ひとりの人間が歴史に相違を起こすことができる、という信念が誕生したことを明らかにしていた。

後におこなったハーバードの講義でエドウィンは、日本史において個人が演じた役割をほめたたえ、彼が最も称賛した人物は、渋沢栄一と、原敬で、それ以外に彼が気に入っていたのは、福沢諭吉、板垣退助、大隈重信、源頼朝、日蓮、豊臣秀吉、伊藤博文であった。

エドウィンとエイドリアン夫妻は、1936年夏から1937年夏まで京都に住み、平穏な一年を過ごした。日本語を学び、田園を散策し、自転車を乗り回し、寺社や美術館や書店を訪れた。二人は、日本と中国で起きていた混乱をできるだけ見ないようにしようと決めていた。

夫妻が京都の北部に借りた家は、被差別部落の隣にあり、誰も家を建てようとしないところだった。日本のことをめったに批判しないライシャワーだったが、これについては言葉をにぎさなかった。「この極度に同質化された社会における少数の追放された分子にたいし、他の日本人が抱く残酷で無意味な偏見の好例である」と指摘した。

この京都でののどかな日々は、兄ロバート・ライシャワーが上海で宿泊予定だったホテルのロビー近くで、急死したとの報せで悲しみの内に終わった。新進の日本研究者の一人と目されていたロバートは、30歳にしてプリンストン大学の講師になり、15人ほどの学生を引率して東アジア研究旅行に出かけていた。

日中間の戦争が1937年7月7日はじまり、ロバート等一行が8月14日、上海のホテルにチェックインしたとき、中国機の爆弾が近くに落ち、ホテルロビーのガラス窓を吹き飛ばし、その破片がロバートのかかとを切断、出血多量で、病院へ急送される途中で息を引き取ったのであった。

ライシャワー一家にとってのショックは底知れぬほど大きく、のちのエドウィンの生涯にも大きな影響を与えた。ロバートは、すでに近代日本史についての二巻の参考書をだし、『日本—政府・政治』は、死後の1939年に出版された。同時代の学者たちは、ロバートこそは近代日本研究者のスーパースターになり、エドウィンのほうは、初期の日本と中国の専門家になるだろうと見ていた。

エドウィンは、研究生活に戻り、夫妻で朝鮮と中国へ渡った。二か月にわたり京城で暮らし、朝鮮各地を広く旅するが、日本軍による占領の「精神的な残酷さ」を目のあたりにし、朝鮮人の国家的願望に共鳴を覚え、支持するようになった。一方で、残酷な占領にもかかわらず、朝鮮半島への日本の投資が、ヨーロッパ列強がより広大な植民地にした投資と比較すると、はるかに大規模だったことに注目した。

北京には7カ月滞在した。ライシャワーは、周囲の貧困ぶりに衝撃を受け、西欧の帝国主義がふるった破壊の残骸をはっきりと目にし、それが、生涯、アジア中のその犠牲者に対する同情を深めることにつながっていった。

ハーバードに戻り、中国語を教えるということが分かったときに、彼は、中国語の話し言葉の勉強に没入したが、中国語を自由にあやつれるようにはならなかった。

1938年の夏、フェローシップの期間が切れ、エドウィン夫妻は故郷へ旅立ち、彼は、ハーバードで教えることになった。6月にハーバードで博士号を授与され、秋には

極東言語学部のインストラクターに任命された。

1930年代のアメリカにおいて、東アジア問題についての関心と知識の欠落は、目を覆いたくなるほど酷かった。30年代の大恐慌と、内側に向かう孤立主義の風潮は、多くのアメリカ人にアジアから近づいてくる脅威をみえなくさせていた。早期に警告を発することのできる中央集権化された情報機関をもたなかった。

メディアは、日本のことをとりあげてもほとんどネガティブなものだった。『タイム』『ライフ』『フォーチュン』の各誌は、1931年に日本が満州を征服すると厳しい日本批判に回った。

アメリカ人宣教師は、中国にいた者も、アメリカに戻っていた者も、蒋介石と、蒋介石夫人こそが中国におけるキリスト教、資本主義、民主主義のための最後の頼みの綱であると、説明した。アメリカのエリートの意見は、絶望的なほどアジア問題について知識が欠けていた。定期的にヨーロッパへ旅する裕福な実業家や、外交政策機関の専門家たちは、日本や中国へほとんど行ったことがなく、東アジア発の正確な報道を得るルートがほとんどなかった。

フランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領の中国にたいする共感は、祖父に由来していた。祖父は、中国で貿易をしていたアメリカの代表的商社、ラッセル社のパートナーだった。ルーズベルトは、ハーバード在学中日本人留学生から、日本の拡張計画案（1889年・明治22年に作成された）を耳にした。日本が、朝鮮、満州、熱河、オーストラリア、ニュージーランド、ハワイを吸収するという途方もないもので、不気味に感じていた。

このような背景のもと、日本についての情報を持ち、それにもとづいた論評ができたアメリカ人はごく少数だった。大学では地域研究の専門家が決定的なほどに不足していた。日本人の大学教授、高木八尺（やさか）が、ニューヨーク市に本拠をおくシンクタンクの依頼を受けて調査した結果の報告は次のようだった。

「日本を取り上げた国際関係論のコースがいくつかあったが、その多くは中国研究の専門家が教えていた。最近、スタンフォードに一つの講座が設けられたが、担当教授は日本語を読めない男性だった。ハーバードは、最近宗教専攻の客員教授が担当する日本語コースでの単位取得を認めることに決めた。コロンビアはもっと慎重で、単位を認める日本語コースは一つだけに限っている。」

日本についての情報を持ち、それにもとづいた論評ができたアメリカ人はごく少数であったが、その一人が、エドウィン・兄・ロバート・カール・ライシャワーだった。

ロバートは、前出のように、1937年8月14日に、上海で急死するが、知識人向けの月刊誌『ハーバース』が1936年～40年にかけて掲載した特集記事の中で、彼は、日本史上における大昔からの文官と軍人の闘争を説明し、さらに、日本の未来は経済問題の解決の仕方しだいである、という文民指導者たちの考えを説明した。

そして、1936年、陸軍の青年将校たちが企てたクーデターが東京の中心部を三日間にわたり麻痺させ、混沌としたときに、一般の日本人に何ができたろうか、という点についてロバートは、表現は違うが次のように判断していたように推測される。

国民全体が神聖で神のごとき天皇に盲目的に献身するよう洗脳されているという見方を却下し、市民の中には、身を潜めてどうにか生き残ろうという態度で、狂信的超国家主義の嵐が通り過ぎるのを待つものが少なくない。彼らは、天皇の神性という概念を信じてはいないが、少しでも疑いを表すると危険なので、黙している。

政党が過半数を獲得した1936年の選挙は、暗殺が起こり軍事力が増大してい

た時期であるが、国民は文民の政党を支持した。1932年には、二大政党が国会の466議席のうち447を勝ち取り、37年4月には354議席を獲得した。

ロバートの得たもう一つの結論は、日本の権力を握った軍事指導者は、国を破滅的な結末へ導こうとする「頭が単純な愚か者」というものだった。

日本国民が天皇をどう見ているかという問題は、アメリカの指導者が「無条件降伏」、ポツダム宣言、日本占領を議論したときに決定的な争点になっていく。

天皇は厄介な問題原因なのか、それとも、目に余る日本の軍国主義解決に役立つ存在なのか。ロバート・ライシャワーの見解が一実際には、その死後にエドウィンが推進する考えが一採用されることになった。

1941年の夏、エドウィン・ライシャワーは、国務省極東課に招聘された。

(以下、次回)

事務局

編集後記

◎561号、珍しくページ数が増えました。内容的に硬い作品が多くなり、読んでいただくのが大変ですが、真面目なものばかりですので、よろしくお願いします。

◎篠塚さんから、554号(2024年4月発信)の「食料自給率をめぐって」について2度目の寄稿をいただきました。554号発行時、当方のミスで目次から漏れており、失礼をしました。お詫びいたします。今回も本格的な論文です。ご注目ください。

◎北林昇さんから、平成23年2月に出版された自著「日本歴史の十字路をゆくー日本の東西と太平洋・日本海を結ぶ歴史紀行」を送っていただきました。293ページにわたり、内容はもちろん、資料、写真、が豊富で装丁も素晴らしく立派な、貴重な本、ビックリです。「日本のへそ・十字路・三遠信紀行」の第一巻、となっていますのでつづきもあるようです。興味のある方、お貸ししますので、事務局宛ご連絡ください。

以上

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所: 〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス: tentisenior06@gmail.com

電話(携帯): 090-2534-1316